

The new  
Philadelphia  
Soundストラヴィンスキー  
バレエ組曲

## 火の鳥

(1919年版)

1 序曲 2 火の鳥の踊り 3 火の鳥のヴァリエーション  
4 王女たちのロンド 5 魔王カステイの踊り  
6 子守歌 7 終曲

●リッカルド・ムーティ指揮／フィラデルフィア管弦楽団

DAM



ムーティ&amp;フィラデルフィア管弦楽団 (Photo by Louis Hood)

## 制作にあたって

レコード音楽といえば、エジソン以来100年の歴史があるわけですが、特にここ数年の技術革新はめざましく、貧弱な音のため以前はつまらないと思われていた音楽が、最新技術によってその全貌を伝えることができるようになって、その音楽の素晴らしさがあらためて認識されるようになりました。

そういった音楽の中でも、とみに脚光を浴びているのがストラヴィンスキーです。昨年はその「春の祭典」(特にティビス盤)がオーディオ・マニアの間で話題となり、このところストラヴィンスキーのレコード・ラッシュといった感があります。

そこで今回は、DAMでも、ストラヴィンスキーの「火の鳥」組曲(1919年版)をとりあげました。3大バレエの中でストラヴィンスキーの出世作と

なったこの「火の鳥」は、他の「ペトルーシュカ」「春の祭典」に比べると「現代音楽なんてつまらない……」と思われている方にも、ずっと親しみ易くロマンティックな曲で、特に「魔王カステイの踊り」などはききとどこかで耳にしたことがあると思います。

ところで、EMIの若きスター、ムーティというイタリアの新鋭指揮者は、以前ベームとともにウィーン・フィルを率いて来日し、NHKTVで放送されておりましたので、御記憶の方も多いのではないかと思えます。このムーティがアメリカのフィラデルフィア管弦楽団の常任指揮者に就任したというニュースが報道されましたが、フィラデルフィア管といえ、ストコフスキー、オーマンディという大指揮者に育てられたアメリカの誇るピ

ッグ・オーケストラです。

このムーティとフィラデルフィア管というフレッシュな組み合わせによる「火の鳥」は数ある同曲盤の中でも、演奏・録音ともに極だつてすぐれた、魅力の話題盤といえましょう。市販盤(東芝EMI EAC80512)はムソルグスキーの「展覧会の絵」とカップリングになっていますが、本レコードでは、「火の鳥」約19分半を、両面に45回転ハイレベルカットティングいたしました。

オーディオ的な聴きどころは、冒頭の序曲の、地の底から湧きあがってくるような大太鼓、チェロ、コントラバスによる重低音の響き、B面冒頭からはじまる「魔王カステイの踊り」の素晴らしいダイナミックレンジの広さ、又ピアノの繊細な美しさ、

そして終曲の壮大なクライマックスの迫力など枚挙にいとまがありません。特に、今回は大太鼓の重低音が凄いの、オーディオ装置の重低音チェックに絶好かと思えます。この録音の優秀さをあまきお伝えするために、従来からの45回転ダイヤ針・ハイレベルカットティング・マスタープレス厚手盤に加え、クォーツ・ロック・カットティングマシンを使用いたしました。DAMといたしましても、更に今後会員の皆様のお役にたてるソフトの開発に努力いたしますので、よろしく御支援のほどお願い申し上げます。

なお、レコード化にあたり東芝EMI(株)をはじめ関係各位に多大な御協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。

## ナポリの男、ムーティ とフィラデルフィア

フランスは粹、ドイツは謹厳実直という具合に、我々はひとつの国それぞれに固有のイメージを持っていて、仔細に眺めても「なるほどフォルクスワーゲン、ドイツのクルマだ」と、ちゃんとひとつのイメージに収まるのだ。別に自動車に限ったことじゃない。その国の「文化」とよぶもの、美術だって文学だって食事だってそうだし、勿論、音楽だってそうなのだ。「バリ管はやっぱ粹だ」というふうに、我々が漠然と抱えたその国の国民性とその生産物である文化とは、結構うまく合致するようだ。

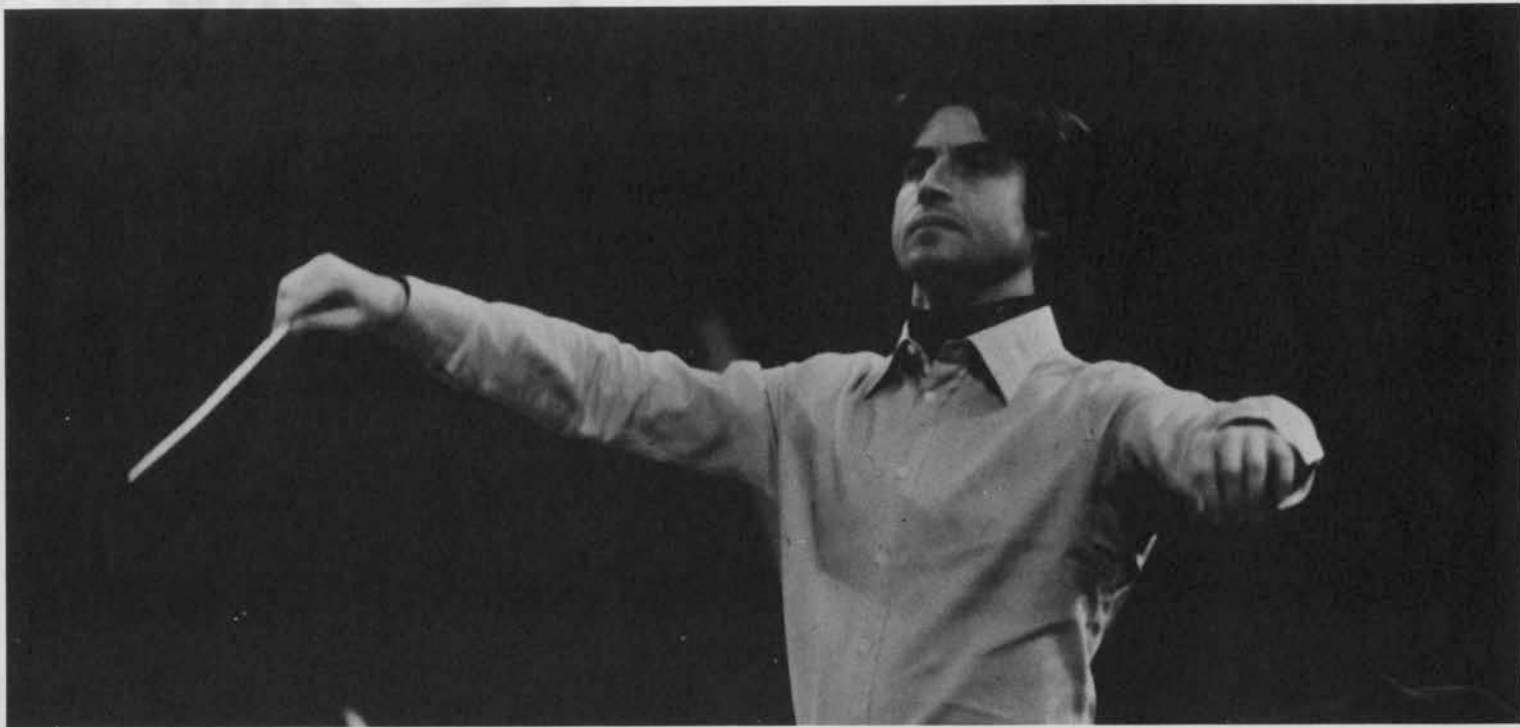
ところが一筋縄でいかないのがイタリアだ。スパゲティと〈オー・ソレ・ミオ〉の国。女とみればやたらに声をかけてくる陽気な男たち。——まっさきに頭に浮かぶイタリアのイメージはそんなところだ。けれど具体的に考えていけば、どうもそのイメージとちぐはぐになってしまう。たとえば、ひと頃大ブームだった「スーパー・カー」など、どんなものだろう。フェラーリやマセラティ——もう精緻な芸術品と呼べるほどのスポーツ・カーを、《オー・ソレ・ミオ》のイタ公、失礼イタリアの男性諸氏が作りあげるなんて、ちょっと信じられないのだ。ミケランジェロやダヴィンチを生み、フェリーニやパゾリーニを擁するイタリアの絢爛たる文化が、どうも《オー・ソレ・ミオ》の女たらしと結びつかないのだ。

音楽の話しよう。トゥリオ・セラフィン、ヴィクトール・デ・サバータ、アルトゥーロ・トスカニーニ、カルロ・マリヤ・ジュリーニ、クラウディオ・アバド、そしてリッカルド・ムーティと、思いつくままに挙げたこれらイタリアの指揮者たちを眺めてみると、明るい音とよく歌う旋律、振幅の大きいダイナミクス——かろうじてそういった特徴が《オー・ソレ・ミオ》風と言えなくもないけれど、底抜けの陽気さなんて感じられない。ましてや、女たらしのイメージからは程遠い人たちばかりだ。顔を思いだしていただきたい。あの苦虫を奥歯で噛みつぶしたようなトスカニーニや、いつもはにかんでいるようなムーティが「よう、ねえちゃん、いいケツしてるねえ。アチキと遊ばない？」なんて（浮浪雲風に）声をかけるところなど、想像出来ないのだ。どうもイタリアという国、我々にとってなかなか抱えにくい国のようなのだ。

閑話休題。安ハムとタマネギとピーマンをケチャップで和えたスパゲッティを、本邦では「ナポリタン」（ナポリ風）と称している。そのナポリに、1941年、リッカルドは生まれた。生粋のナポリターノというわけだ。現在（1979）まで、そのレコーディング・レパートリーは、イタリア・オペラ以外に、モーツァルト、ベートーヴェン、シューマン、メンデルスゾーン、チャイコフスキー、ドヴォルザーク、ムソルグスキー、プロコフィエフ、そして今回のストラヴィンスキーと、

甚だ多彩・多岐にわたって、一見とりとめのない印象を与える。早い話、小学生用音楽の年表（あの音楽教室の後ろの壁に貼ってあったやつ！）に出てくる「大作曲家」の総出演といった趣きなのだろう？ そんな疑問を持つのも当然だ。で、それを考え調べているうち、謎を一挙に解決する文章が見つかったので、少し長くなるけれど引用させていただこう。彼の生地ナポリについて、イタリア在住の硯学・塩野七生氏（美しい女性です）が書かれた文章だ。

「雑草のようにたくましいとは、ナポリの庶民のようなものではないかと、私は時々思う。歴史的にみても、ナポリは、攻めてこられると抵抗するでもなく、簡単に開城して迎え入れてしまう。王様は、いつもイスキア島あたりに逃げて行って、様子を見ている。ナポリの人々も、サボタージュもレジスタンスもせず、痛烈な皮肉をこめた小唄ははやるが、征服者は自滅するから、それを待っていればよいのである。征服者が自滅しそうな頃合いを見はからって、王様が戻ってくる。そうすると誰もが王様の後について、征服者を追い出すというわけだ。こうして、スペイン人もフランス人も追い出された。能力のある征服者だと庶民も納得がいくのか、王朝は延々と続く。そうすると庶民も、王様になつてくる。ナポリっ子にとっては、イデオロギーなんてものは、輝く太陽と紺青の海、おいしいスパゲッティの一皿の前に、色あせて見えるものらしい。彼らには、主義主張よりも人間の個人的魅力の方が、びったりくるのかも知れない」（「イタリアからの手紙」新潮社刊）



リッカルド・ムーティ (Photo by Reg Wilson)

ムーティのレパートリーの多彩さを、この文章と考え併せると、うなずけるところが実に多いのだ。ロマン派や国民楽派といった「主義主張」よりも、音楽個々の魅力にひかれた結果があのレパートリーなのだ。この特徴ナポリに限らぬイタリアの音楽家に、総じて言えることも知れない。先刻あげた指揮者たちも、大ざっぱに言ってレパートリーが広い。そして「彼は後期ロマン派のスペシャリスト」などとレッテルを貼りが本邦の音楽ファンに、イタリアの音楽家がいまひとつ人気を博さない理由も、どうやらそこら辺にあることに気づく。レッテル貼りをやめたとき、我々は彼らの美意識が類い稀なことを感じるだろう。まるで「輝く太陽と紺青の海」のような明るい表現と、軽快でスマートなリズムに裏打ちされた新鮮な響き。そんな南国の柑橘を思わせる音楽を、イタリアの指揮者たちは聴かせてくれる。そして今、その筆頭とも言えるのが、このリッカルド・ムーティなのだ。

黄金週（4日）の4日、酔眼で夕刊に目を通していたら、こんな見出しを片隅にみつけた。

### 後任にムーティ氏

#### フィラデルフィア管弦楽団指揮者

正直いって、驚いてしまった。酔いもいつべんにさめてしまった。

記事によると（3日AP電）、オーマンディは'79-'80年のシーズン終了とともに第一線を退いて同楽団の名誉指揮者となり、後任にはムーティが就任する、という。

たしかに、オーマンディがストコフスキーのあ

とをうけてフィラデルフィア管弦楽団の常任指揮者に就任したのは1938年だから、もう41年の長きにわたっている。その間、常に高い水準を維持し、「オーマンディ・トーン」と呼ばれる美しいサウンドを聴かせてくれた。けれどそのオーマンディも既に80歳、ひそかに次期後継者捜しが始まっているという噂もあった。下馬評では、1977年に首席客演指揮者に就任したムーティの名が、まっさきに挙げられていた。

しかし、である。やはり、意外だった。その交代の時期が予想を大きく上回って早かったこともある。が、それ以上に、ムーティの欧米での評価の高さがいまひとつ実感として理解出来なかった——というのが正直なところだろう。今回の「常任」就任は、まさにその人気の高さを物語っているのだ。

このレコード、新生ムーティ=フィラデルフィア・コンピの先行きを占う絶好の一枚といえよう。定評ある「オーマンディ・トーン」がムーティの棒のもとでどのように変わるのか興味のあるところだが、このレコードに関して言えば、実にいい結果をもたらしていると言えるだろう。磨きぬかれた弦のつや、なめらかな管のバランスに加え、オーマンディの場合に感じられなかった潑刺とした力感が、強くこの「火の鳥」に漲っているのだ。単に若きゆえのものでない、ムーティ天性の美感が、この老練の銘器を得て十全に発揮された演奏といえるだろう。今後のムーティ=フィラデルフィア・コンピの活躍を大いに期待させる一枚なのだ。



ストラヴィンスキー

## ストラヴィンスキーと バレエ音楽「火の鳥」

「ある朝、目が覚めたら有名になっていた」なんて成功物語、こうマス・メディアが発達してしまうとめったに起こり得ない。商売になる可能性がチラとでも見えると、早速や寄ってたかって青田刈りをしてしまう。従って眩目する程の大き器が埋もれている可能性が皆無に等しくなってしまうのだ。まあ、才能も金もそして度胸にも恵まれていると言えない我々は、せいぜい「ある朝、目が覚めたら二日酔いになっていた」程度で我慢するしかないだろう。

ストラヴィンスキー(1882-1971)は、そういった成功物語が通用する時代に生きた作曲家だった。この「火の鳥」で一夜にしてヨーロッパ中で有名になった男だった。

1882年、ロシアのオラニエンボウムで生まれた彼は、正規の音楽教育をうけず、大学に通うかわらリムスキー=コルサコフの内弟子となって作曲の勉強をした。その頃の若書きの作品に目をとめ、ひそかに注目を寄せていた一人の男がいた。セルゲイ・ディアギレフ。彼は当時既に、興行主として名をなし、ロシア・バレエ団を結成していた。彼がそのバレエ団を率いてパリ公演を計画し、演目を「火の鳥」に決めるとき、作曲家として頭に浮かんだのがストラヴィンスキーだった。全く無名の若い作曲家に依頼するのは、一つの大きな賭けだったろう。ストラヴィンスキーはその期待に応えた。1909年冬から翌年3月にかけて作曲。

6月25日、パリ・オペラ座で初演。センセーショナルな大成功を取めたのだ。

(第1面)

この曲、題材をロシア民話にとっている。まず序曲は低弦の主題で始まり、魔法の国の不気味な夜の雰囲気がかかされる。やがて明るさを増す舞台に一本の銀のリンゴの樹が生えている。たわわに実るリンゴの実は金色に光り輝いている。そこに飛来したのが「火の鳥」だ。(手塚治虫の、あの鳥を考えていただければ結構。)この火の鳥の飛翔するさまを描いた音楽が火の鳥の踊り。火の鳥は金のリンゴをついばみながら、樹の囲りを飛びまわる。(火の鳥のヴァリエーション)

その様子を見ているものがいた。イワン王子だ。彼は狩に出て道に迷い、この不思議な光景を目撃する。ものかげからとび出たイワンは、火の鳥をつかまえる。火の鳥は一枚の光り輝く羽根を抜き、王子に与えて許しを乞う。王子は火の鳥を放してやり、火の鳥は飛び去っていく。

すっかり白んだ遠景の中に古城がみえる。その城からやってきたのが魔王カスチェイに捉われていた13人の乙女たちだ。彼女たちは王女たちのロンドを踊る。その中の最も美しい王女を一目見るなり、イワンは自分が恋に陥ちたことに気づくのだ。イワンは彼女に声をかける。おどろく彼女。そして始まる二人の会話。王女もイワンを憎からず思っているようだ……

(第2面)

そこに城の主、魔王カスチェイが手下の怪物を従えてあらわれる。自分の女にちよっかいを出されたのを怒って(自分の醜いのはたなにあげて)、イワンを石にかえようと呪文をとこなえる。が、全然きかないのだ。火の鳥から貰った光る羽根が、その呪文を打ち破る力を持っていたのだ。そして火の鳥が戻ってくる。火の鳥は魔王とその手下に魔法をかけ、彼らを思いのままに操ってグロテスクな踊りを踊らせる。この場面が魔王カスチェイの凶悪な踊りで、荒々しい金管の響きに彩られてクライマックスを迎える。踊らされた魔王と配下は、もう、フィーバーしたなんてものじゃない、バタバタとへたりこんでしまうのだ。次いで火の鳥は、この世のものとは思えぬ美しい子守歌を歌う。彼らはすっかり深い眠りに落ちていく。火の鳥はその様子を見届け、王子イワンにカスチェイの魂の入った卵のありかを教える。イワンはそれを打ち砕く。その瞬間、カスチェイは死に、魔法はとけ、古城も手下の怪物どもも雲霧消散する。平和が甦ったのだ。ホルンの静かな旋律によって、喜びに満ちたフィナーレがはじまる。王子は王女に求婚し、ふたりは結ばれる。自由になった乙女たちと火の鳥に祝福されながら、曲は終りを迎える。

真庭 健

## クォーツ・ロック、厚手レコードについて

【厚手レコードについて】

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250 $\mu$ ~280 $\mu$ 、(L-R)、ピーク・レベル+20dB程度のもは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートとの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このような再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されているようです。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ、超薄形レコードが話題となりましたが、その一方、レコードの厚さ(質量)がもたらす音質への影響について、再生時の問題を含んだトータル・サウンドとして研究されてきた経過が有ります。厚手レコードの持つ音質上の優秀性に着眼した当社では、今までの各種データを基に、材料開発、プレス技術をも含めたプロジェクト・チームをつくり、厳しい条件下でヒヤリング測定をはじめとした各種テストを繰り返し、遂に音質バランスがラッカー・マスターに近いトーン・キャラクターをもつレコードを、ここに提供することが出来ました。レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみいただけると確信しております。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれました。

【クォーツ・ロックについて】

最近のハイ・クォリティー・レコードに於けるソフト技術やそのテクニックの進歩は限り無く、音楽へのアプローチの仕方も著く多様化しています。今やアナログ・オーディオ・ディスクの全盛時代といっても過言ではありません。また一方で

は、デジタル技術の進歩により、PCMテープやビデオ・ディスク等のデジタル・オーディオの台頭もめざましく、未来のサウンドへの夢も無限に広がっているといても過言ではありません。

このような状況の中で、又一枚新しい「DAM45オーディオチェック・レコード」がここに誕生いたしました。

この「DAM45」シリーズは、制作する時点での最新のソフト技術とテクニックを導入したレコードとして、マニア及びユーザーの皆様にご好評を得ております。

今回は、EMIの若手指揮者でスター化を期待されているR.ムーティと、EMIと新契約したフィラデルフィアOrch.のコンビによる、バレエ音楽「火の鳥」をソースに、45r.p.m.で1枚のアルバムとしました。華麗なオーケストラ・サウンドによる、近代管弦楽の名曲を、余裕あるカッティングで一段とパワフルなサウンドとして、大変面白いレコードと申せましょう。

このレコードは、東芝EMIの誇る「サウンドファイル」シリーズのスタッフと技術をベースとし、更に第一家電さんのスタッフが一体となって、「DAM45」の音楽再生への可能性を求めて総集されたオーディオチェック・レコードです。

今回のレコードはクォーツ・ロック・DDモーターを採用しています。従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の「DAM45」では、高精度にサーボされた、クォーツ・ロック・DDモーターと、ダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスターリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕の有る音溝幅と大振幅に耐えられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。その結果、華麗なオーケストラ・サウンドを見事に再現し、混濁感も無く、リニアリティの良いダイナミック・レンジを持つ、オリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

東芝EMI(株)音響技術課 原 清介

## マスター・プレスについて

マスター・プレスのことについて知る前に、まず一般のレコードの製造工程の説明から始めましょう。

①マスター・テープ 全てのレコード（ただしダイレクトカッティング盤を除く）の音源は、この様なテープに収録されて録音スタジオから、カッティング工程におくられます。このレコードの場合は、マスター・テープの状態でイギリスのEMI本社から東芝EMI(株)に送られてきたわけです。なお、このマスター・テープの規格は一般に、 $\frac{1}{4}$ インチ、2トラックで、テープ・スピードは38cm/sec又は76cm/secとなっています。

②ラッカー・マスター ラッカー盤は、アルミの円盤に硝化綿を塗布したもので、その表面はとて柔らかいです。これにマスター・テープの音がカッティング・マシンによって溝として刻み込まれます。

顕微鏡による溝検査（隣りの溝との接触、溝の途切、溝幅や深さのチェック等）終了後、次の工程に進みます。

銀鏡処理  
ニッケル・メッキ  
はく離

③メタル・マスター ラッカー盤にメッキ処理をして、それをはがすと凸型（メタル・マスター）ができます。このメタル・マスターで直接プレスをするを、マスター・プレスというわけです。

メッキ処理  
はく離

④マザー メタル・マスターに再度メッキ処理をして、はく離すると、マザーができます。これはラッカー盤と同じ凹型ですが、ラッカー盤と違い、金属なのでカートリッジで検聴することができるのです。

⑤スタンパー マザーにメッキ処理をして、はく離するとスタンパーとなります。スタンパーは一枚のマザーから複数枚数の製造が可能であり、レコードのプレス枚数に応じて、スタンパーが作製されることになります。

プレス機  
テスト・プレス  
(テスト盤)

⑥レコード 12インチ (約30cm) スタンパーがプレス機にかけられ、レコードが大量に生産されます。これで、レコードが完成!

W W W W

以上が、通常のレコードの製作工程ですが、おわかりいただけましたでしょうか。

マスター・プレスとは、以上の工程のうち④と⑤を省略して、いきなり⑥のレコードをプレスすることをいいます。

何故、このようなことをするのかといいますと、マスター・テープから直接カッティングされた、ラッカー盤が、極めてナチュラルで素晴らしい音質をもっているため、これを損うことなく、レコードにするべく、複製の工程を少くするのは、

写真の複製で、輪郭がぼけたり、テープをダビングするとS/Nが悪化して鮮度が落ちるのと同じように、高度な技術をもってしても、レコードの工程で複製をくり返すたびに、微かな音の差を生じてくるのは、止むを得ないことといえます。

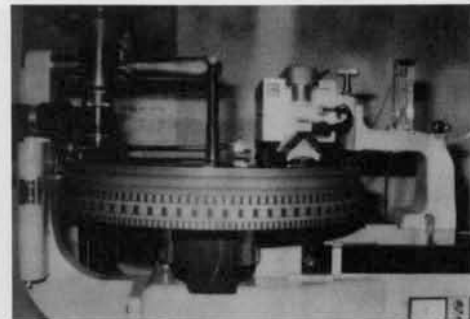
そこでこのような、マスター・プレスをとりあげたのですが、マスター・プレスにも欠点があります。それは極めてコストがかかり、又、大量生産がきかないということです。なにしろ、1枚のメタル・マスターでプレスできる限度は1,000枚内外とされています。今回DAMのマスター・プレスでは、安全を見込んで1枚のメタル・マスターからのプレスは500枚前後といたしました。ですから両面あわせて数10枚のラッカー盤をカッティングする必要があるわけで、おのずと製造コストも大幅にupすることになります。

DAMがあえてマスタープレスを制作するのは、“本物の音の追求”というDAMのポリシーを会員の皆様に聴いていただきたいからで、東芝EMIの誇る「プロ・ユース材」を使用し最高品質のレコードをお届けすることになりました。

(M.W.)

レコード材質及び製造プロセスについては、東芝EMIプロフェッショナル・レコード仕様と同様現時点最高の製造技術を導入して品質の安定化を図っております。

尚このレコードはハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ヒリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩擦状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。



クォーツ・ロック・DD使用カッティング (Photo by Y.F.)

## 30cm45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードより振速度が早いので、針先のトレース性は良くなりますが、カートリッジを含むトーンアームの慣性などで軽針圧の場合正確にトレースしないこともあります。歪みなどの恐れのある場合針圧を許し得るまで増して下さい。

(3)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。

(4)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますので室温を15℃～20℃位に保って下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

### ●レコーディング・データ

Recorded: 15 & 18 March 1978  
Old Metropolitan Opera House,  
Philadelphia

Producer: Christopher Bishop  
Balance Engineer: Michael Gray

### ●カッティング・データ

Cutting Engineer: Seisuke Hara  
Yoshio Okazaki  
Cutting: TOSHIBA-EMI L.T.D Gotenba  
Cutting Date: May 9, 1979

Tape Recorder: Studer A-80 MK II  
Drive Amplifier: Neumann SAL-74  
Cutting Lathe: Neumann VMS-70  
Quartz Rock Moter

Cutting Head: Neumann SX-79  
Diamond Cutting Stylus

企画：第一家庭電器(株)DAM

レコードから無断でテープその他に録音することは法律で禁じられています。

製造：東芝EMI株式会社 MADE IN JAPAN